ヒラリー・パトナムの真理の構想

高木博登（京都大学大学院文学研究科・博士後期課程）

本発表ではヒラリー・パトナムが内在的実在論（Internal Realism）転向後に提唱した「真理の理想化された合理的受容可能性説（Idealized Rational Acceptability Theory of Truth: 以下「IRA 説」）」について論じる。IRA 説とは、真理と認識論的正当化の間に密接な関係を認めることによって、内在的実在論が相対主義と形而上学的実在論のいずれかに陥るのを避けつつ実在論的立場を擁護するためにパトナムが用いた道具立てである。しかし、IRA 説はパトナム自身の記述の不明瞭さもあって様々な批判を浴びてきた。本発表はパトナムの IRA 説を擁護する前段階として、IRA 説の内実を明らかにすることを目的とする。

本発表は大きく分けて二つのパートから成る予定である。

まず前半パートでは、中期パトナムの主著である『理性・真理・歴史（*Reason, Truth and History*）』の第三章を主なテキストとしながら IRA 説がそもそも何を主張しようとしていたのかを明らかにする。その際に注目するのは、パトナムは IRA 説を唱えることによって真理概念を「理想化された合理的受容可能性」によって定義付けようとしているのではなく、真理概念の「非形式的な解明（informal elucidation）」を行おうとしているという彼自身の弁だ。

パトナムの内在的実在論が持つ最も重要な特徴は、この立場が実在論を自称しつつも概念枠と私たちの認識的探究から独立した実在の対応関係を否定した点にある。すなわち、私たちは概念枠の受容、改訂、棄却といった認識的探究の営みを概念枠に対して内在的な整合性、予測の精度、道具的合理性といった基準をもとに行うほかない。概念枠が実在のあり方を漸次的に正しく記述するようになるという描像を拒否するならば、パトナムはどのようにして実在論的立場を擁護することができるのか。このときに重要になるのが IRA 説である。すなわち、ある主張は（例えば顕微鏡の発明などによって）認識的条件が改善されることによってより厳しい精査を受けることになるが、このような探求のプロセスを続けていったならば認識的条件が改善され理想的なものに近付き、私たちが受容する信念や概念枠も収束するだろうというという、私たちの探究における統制的想定を指摘するのがパトナムの IRA 説だったのである。

本発表の後半パートではパトナムの IRA 説をシェリル・ミサックの真理観と比較し、この比較を通して IRA 説の特徴をより明確にする。

パトナムの IRA 説をとりわけミサックの真理観と比較するのには二つ理由がある。まず一つ目は、パトナムもミサックもプラグマティストでありながら真理が実質的な概念だと考えているという理由である。パトナムやミサックを含めた現代のプラグマティストは共通して、概念枠が私たちの認識的探究から独立した実在を漸次的に正しく記述するという探求観を否定した。その一方で、プラグマティストたちの間では真理のデフレ主義を採用するか、より実質的な見解を擁護するのかを巡る対立が存在する。真理のデフレ主義を採用するプラグマティストとしては W.V.O.クワインやリチャード・ローティが挙げられ、事実パトナムとミサックはクワインやローティを批判するなかで自身の哲学的立場を彫琢していったという側面がある。

パトナムとミサックを比較するもう一つの理由としては、両者の真理概念に関する見解がいずれも（ただし私の IRA 説に関する解釈が正しければ）私たちの認識的探究における統制的想定の内実を指摘するものだという理由が挙げられる。一見すると互いに非常に類似した真理観を展開しているパトナムとミサックであればこそ、両者の見解を比較することでパトナムの IRA 説の類似性がより一層浮き彫りになるであろう。

＜主要参考文献＞

Misak, C. (2004) *Truth and The End of Inquiry: A Peircean Account of Truth*: Oxford University Press.

Putnam, H. (1981) *Reason, Truth and History*: Cambridge University Press.

Putnam, H. (1994a) ‘Does the Disquotational Theory of Truth Solve All Philosophical Problems?’ in James Conant (ed.) *Words and Life*, 264-278: Harvard University Press.

Putnam, H. (1994b) ‘On Truth,’ in James Conant (ed.) *Words and Life*, 315-329: Harvard University Press.

Shields, M (2022) ‘Truth from The Agent Point of View,’ *The Philosophical Quarterly*, pqac072. Doi: https://doi.org/10.1093/pq/pqac072